

旧鹿ヶ谷修道院 和中庵

岡村敬二

和中庵は三代藤井善助（天保七年―明治三九 一八三六―一九〇六）の次男彦四郎（明治九年―昭和三年 一八七六―一九五六）が鹿ヶ谷に建てた邸宅である。藤井有鄰館を創設した第四代藤井善助（明治六一―昭和一八 一八七三―一九四三）は彦四郎の三歳違いの兄である。

藤井彦四郎は、明治九年に三代目藤井善助の次男として北五個荘村宮荘に生まれた。明治三六（一九〇三）年に兄が家督を相続して第四代藤井善助を襲名したが（『藤井善助と有鄰館』近江商人博物館一九九九年 2891.F.11）、この彦四郎は、それより前の明治三二年には分家をしており、早くも明治四二年には藤井糸店を創業して「スキー毛糸」の製造販売などで成功をおさめ財を成した。こうした彦四郎の事績は『藤井彦四郎傳』（藤井彦四郎伝編纂委員会編刊 一九五九年 2891.F.11）にゆずるとして、この彦四郎の営んだ和中庵に到るまでに彦四郎が住まわってきた家について「翁の住居」（『藤井彦四郎傳』）にしたがって述べていくこととしたい。

三代善助は、近江屋の屋號を持ち染呉服や織物の卸売業を営み、六角通富小路大黒町に支店を持っていた。そ

して明治二〇年ごろ内外服会社を起して絹織物・洋服生地の製造販売をはじめた。次男彦四郎は、明治三二年一月に幼名磯松から彦四郎と改名しまた結婚もしたがその後も父親の京都店（上京区両替町通二条下ル金吹町）に一店員として勤め、ここで寝起きしていた。その後明治三五年に西陣支店（上京区智恵光院通り中筋上ル横大宮町）が出来てからはここで起居した。明治四〇年一月には長兄善助が西陣支店から手をひくこととなり彦四郎が独立営業をすることとなる。三二歳のことであった。

大正二年には御所東の梨木神社付近で借家に、さらにその秋には岡崎広道の森本氏の借家に住んだ。そして大正三年七月には吉田神楽岡に転居しここで三年を過ごした。この神楽岡の家は写真でみると立派な庭を持つ大きな住宅であり、彦四郎が鹿ヶ谷和中庵を造作するあるス Tepp の家であったようにもみえる。そして大正五年五月には川越新四郎所有の宅地二〇〇坪と畑約一〇畝、それに地続きの岡崎宮の脇町の平安牧場跡（現在の東天王町）を買入れ、南禅寺に建っていた家屋を買って平安牧場跡に移築してここに住んだ。



｜ 大正2年秋に住んだ岡崎広道の家（『藤井彦四郎傳』より）



｜ 吉田神楽岡の宅（『藤井彦四郎傳』より）



岡崎東天王町の宅



岡崎東天王町宅の離れ座敷

岡崎東天王町の宅と同宅の離れ座敷（『藤井彦四郎傳』より）

彦四郎に土地を譲ったこの川越新四郎は、明治一五年に聖衆来迎山禅林寺（永観堂）内に移転し成立した京都癡狂院を李家隆彦・棚橋元章らと共同経営した人物である。

この京都癡狂院は、明治八年に檜村正直が南禅寺に設置した公立の精神病院である。それが財政難により明治一五年に廃止されることとなったのだが、それを北垣國道京都府知事が永観堂境内に移転成立させたものである。

この永観堂内の私立京都癡狂院も明治一八年には川越新四郎の経営となり、その後二代目の川越直三郎の代の大正二年に浄土寺馬場町に川越病院として移転し開院している（小俣和一郎『精神病院の起源 近代編』太田出版二〇〇〇年 4937/Omu、「近代日本精神医療史研究会」<http://kenkyukablog.jugan.jp/?page=1&month=201102>二〇一二年一月五日検索）。藤井彦四郎は大正五年五月にこの川越の土地を購入しているわけだが、永観堂とこの東天王町の川越の土地はほど近く、この川越病院設立にとともない移転することとなったその敷地（屋敷地か）を売却したものであろうかと推測される。

この東天王町敷地の庭の奥には白川が流れて南に華頂山、北に黒谷、東に大文字と、格好の住宅となり、昭和二年暮れに和中庵に移るまでの一〇年余りをここで過ごした。そしてこの岡崎宮の脇町の邸宅よりもさらに閑静

で広大な鹿ヶ谷の桜谷町に土地を確保し、住宅を営むこととなるのである。まさに満を持して、鹿ヶ谷桜谷町に和中庵を営むこととなったというわけである（藤井彦四郎傳）。

このように彦四郎が鹿ヶ谷の桜谷町に土地を確保し、和中庵を造作するまでのことを詳しく記したのも、当時の岡崎・南禅寺地域や、北白川小倉町、下鴨あたりの、疏水分線周辺の宅地開発事情と、彦四郎の和中庵造作を対照してみたいと考えたからである。よく知られているように、明治二三年に敷設なった琵琶湖疏水本線および分線は、当初その流域を水車動力による商工業地域としての開発を予定していたところだが、それが途中で水力発電に切り替わることで、工場地域としての開発の道はなくなった。この疏水流域の地域についてあらたな開発の道が模索されることになる。明治二八年岡崎の地で開発された第四回国勧業博覧会は、京都の近代化の道筋を、千年の都の伝統京都にあわせて産業発展させていく京都の方向性をさだめることとなり、鴨東地域がいつそう発展していくこととなる。それはこの内国勧業博覧会の案内パンフや『風俗画報』の記事などではきまって市電（京電）が走る背景に大文字をふくめた東山の山並みが示されるが、それはその象徴であらう。

さてこうして工業化からまぬがれることとなった疏水の流域地域は、伝統の都京都にふさわしい別荘地や宅地開発の道をとることになる。明治四〇年前後には鐘紡子会社の日本絹綿紡織会社が北白川小倉町に土地を確保した。しかしながらこの紡織会社は整地をしたものの開発にいたらず、明治四三年に藤井善助の関西倉庫株式会社が買収する。

大正七年四月、京都市は周辺の町村を合併して二倍以上の市域を持つこととなるが、大正八年には都市計画法が公布となって、東山・洛北地域は住宅地として開発が進められていく。第二琵琶湖疏水、上水道、道路拡幅といった三大事業により、東山通り、今出川通り、丸太町通りなどの拡幅が行われ、また仁王門通り、河原町通りも広げられて市電も延伸され、今出川・丸太町通りの東にあたるこの鹿ヶ谷など東山地域の宅地開発の素地ができることとなる。先の小倉町の土地開発に対しての東京側資本の共同経営の申し出を断った藤井善助は、大正一四年日本土地商事株式会社を設立して小倉町の開発を行うことになり大正一四年一月分譲を開始した。おおむね百坪以上の土地区画と街路の整備により閑静で整然たる街づくりをおこなったこの小倉町の宅地開発は、下鴨地域などその後の土地区画整理事業の町づくりに大きな

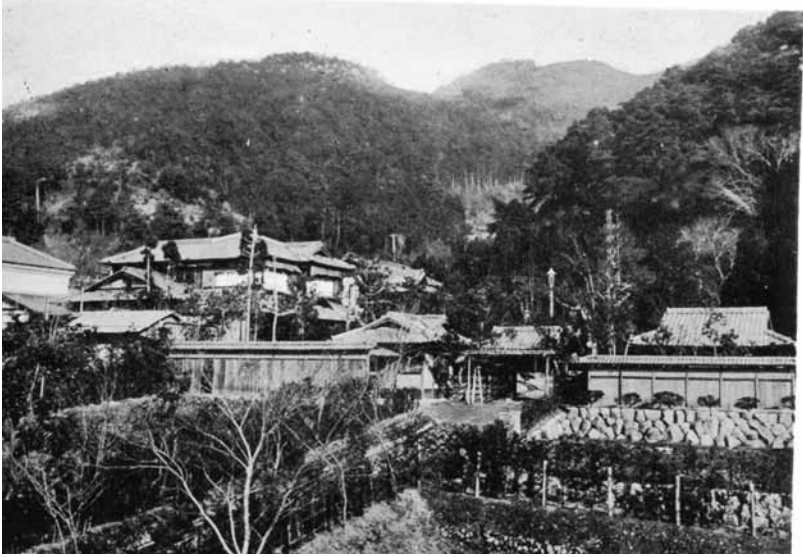
影響を与えたとされる。小倉町より北の地域では地主たちによる区画整理組合が昭和のはじめに結成され区画整理事業が行われている。本学近くの公園には、筆者が確認した限りで三カ所の記念石碑が建てられている（この宅地開発事業については、石田潤一郎「北白川・下鴨／京都―京都の近代が求めた居住空間」、矢ヶ崎善太郎「南禅寺下河原／京都―近代京都に花開いた庭園文化と数寄の空間」ともに『近代日本の梗概住宅地』鹿島出版会二〇〇〇年を参照した。なおこの東山界限については、二〇〇八年・二〇〇九年に学生とともに巡覧した記録『京都の町歩き―東山麓フィールドワーク』にまとめている）。

さてこうした京都の町の近代化と宅地開発といった時代背景を確認したうえで、藤井彦四郎の和中庵造成にもどることとしたい。大正一五年彦四郎は、まさに満を持してと言つてよいと思うが、大文字のすそ野、法然院・安楽寺・靈鑑寺門跡に続く鹿ヶ谷桜谷町の土地一万数千坪を取得した。これは先に述べた疏水流域地域の宅地開発という時代の気運に乗っての宅地造成であったといつてよい。

山のすそ野でありまた広大な敷地でもあったこの土地を開発するのは大変な労力を費やすことになるが、それでも根が建築好きの彦四郎でもあり、時間をみては現地に足を運んで指示を与えている。大正一五年三月一七日



｜ 和中庵の建築工事（『藤井彦四郎傳』より）



｜ 和中庵の正門と背景の東山（『藤井彦四郎傳』より）

から、山本組・永田組・東村組・山三組や植木屋らをして、彦四郎の陣頭指示のもと、工事に取り掛かった。そして本邸とともに、長男正次郎・次男繁次郎・分家栄之助・三郎らの住宅も建築した。本宅は漢学者長尾雨山が「中庸」からとって和中庵と命名された。この住宅のお披露目の会は昭和三年四月一三日に執り行われている。和中庵の扁額はこの長尾雨山のもの、また木堂犬養毅の額も掲げられた。犬養毅は、彦四郎の兄四代藤井善助が明治四一年衆議院議員に当選してその政治家時代に出会い、師と仰いだ人物である。長尾雨山も内藤湖南らとともに有鄰館のコレクション形成に助言を与えた人物であった。

山裾を切り開いたこともあり、和中庵から西に広がる眺めは天下一品であった。それにもまして東山から流れ出る水は清らかで絶えることがない。筆者が学生の頃には、この和中庵と靈鑑寺の間の道を登った鹿ヶ谷の水源近くに、この水を瓶詰して売るための工場があったと記憶している。そのようにこの水は清冽なものであった。この流れには石橋がかけてられていて豊里橋と名付けられ石杭にその名が刻まれた。また敷地内には桜の野生種エドヒガン（江戸彼岸）の大木があり四月上旬には美しい花を咲かせる（三七 左京区へカトリック・ノートルダム教育修

道女会鹿ヶ谷修道院〕エドヒガン』『京都市の保存樹Vol.1』京都市建設局水と緑環境部緑政課編 平成一四年)

和中庵は門を入ると南座敷と洋館、その東に渡り廊下から一段高い敷地に奥座敷が続く。この奥座敷は客殿とよばれ、近江能登川から移築されたものである(『藤井彦四郎傳』)。洋館の一階南側の半円形のポーチと、室内のセセシヨン風の装飾のある階段が見どころとされる(中川理「一四九ノートルダム修道院(旧藤井邸・和中庵)』『京都市の近代化遺産 近代建築編』京都市文化市民局文化財保護課 二〇〇六年 331頁以下)。

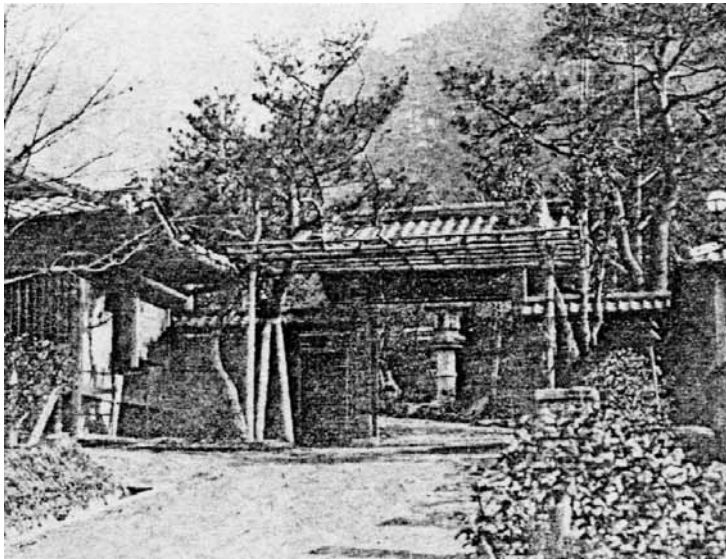
この和中庵には、昭和三年二月に彦四郎の父三代善助の銅像も作られた(銅像は『藤井彦四郎傳』に掲載され、さらにこの銅像を前にした写真が『Notredame Goes to Japan』に載る)。ここには皇族も来訪されている。昭和七年には賀陽宮恒憲王殿下が一泊し、また久邇宮多嘉王殿下も訪れた。この賀陽宮は夫妻でも来られて幾度か宿泊もしている。この皇族の宿泊にあたっては府知事からの依頼と照会が彦四郎宛になされていて、その文章が『藤井彦四郎傳』に載る。そこには、「殿下に於かせられては、頗るご満悦の御模様を拝察候」とか、妃殿下同伴で藤井邸宿泊の希望がだされ、「実は貴邸には度々の御宿として御迷惑と存じ候間、他へ御変更の御意見を申上候も、殿下には貴邸が特に御

気に入りにて」と、度々の宿泊がなされており、この鹿ヶ谷の邸宅がことのほか気に入っていたことがみてる。

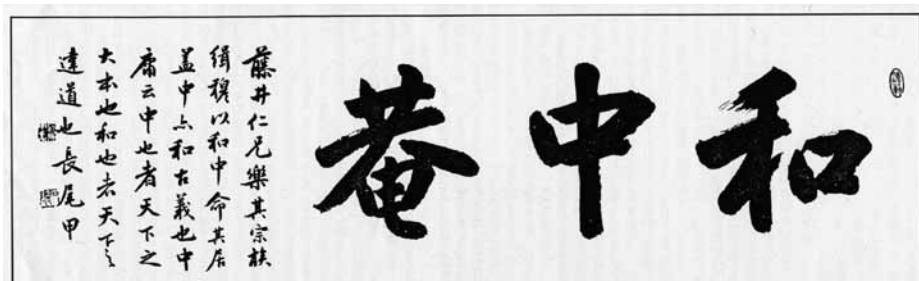
さてこの建物は、昭和二四年、藤井家からノートルダム教育修道女会へと売却されることとなる。この売却について『藤井彦四郎傳』では、次のように記述されている。終戦となり連合軍の占領政策について財産税が話題になった。多くの財産を有していた者はいささか狼狽の体であったが、彦四郎はならんら執着することなく、財産税の申告にあたっては減額の申告をしたり隠匿をしたりしないようにと言い渡した。藤井家の状態は売却をしなければならぬ境涯ではなかったが、彦四郎は未練を残すことなく売却することとした。彦四郎は、「敗戦の日本には、かかる広大な邸宅の必要はない。徒に広大な邸宅を遺すことは子や孫に必要以上の負担をかけるものである。また子孫が、若しやこれを処分せねばならぬなり、祖先に対して相すまぬと言う、心使いをせねばならぬことが可愛想である。わしが建てて、わしが処分するには、どこにも遠慮はいらぬものである」と語ったという。このようにして和中庵の土地と建物は、藤井家からノートルダム教育修道女会へと売却されることとなった。売却の具体的な次第は、Mary Eugenia Laker、(メリー・ユー

ジニア・レイカー) *Notredame Goes to Japan* 1988
(BV/34452/1.35/1988) に回想があり、それをもとにすこし述べておくとつぎのとおりである。

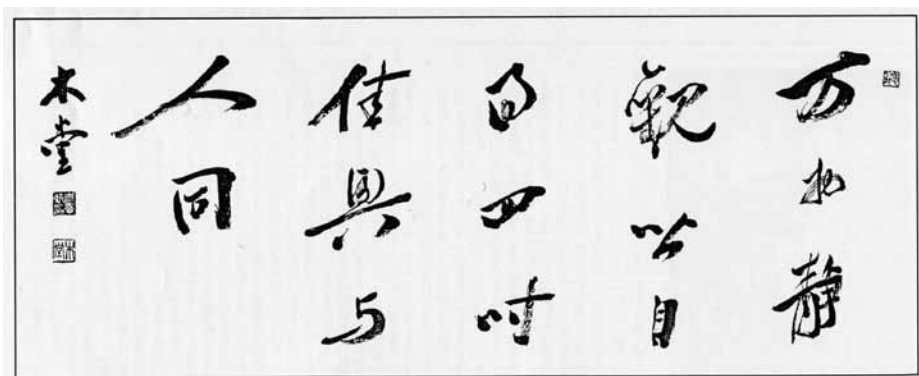
昭和二三年九月に修道女会セントルイス管区本部の四名のシスターが来日して、一〇月に京都でいくつかの物件を検討している。京都にはいり、シスターたちは松ヶ崎小脇町一七のメリノール女子修道会 (Convent of the Maryknoll Sisters) に身を寄せた。この小脇町は小竹藪町の西隣の地域にあたる。ここに滞在して高野の教会にも出かけ、また京都の町を散策し、大学などの施設を見学したりしている。そうした見学のない時には、修道女会修道院の物件をいくつか当たって検討をした。しかしながら、それらはいずれもそれぞれに長短があり、なかなか決まらなかった。そしてその年の一二月中旬に、ようやくこの、東山の西のすそ野、鹿ヶ谷桜谷町に建つ日本家屋で一部洋館からなる藤井彦四郎の和中庵をみつける。価格の問題で成り行きはしばらく不透明だったが、カトリック関係者の仲介で交渉が進展していった。価格については、それを変更しないで別の土地も提供するという、彼女たちにとっては有利な条件で交渉が成立し、クリスマスの数日前に取得することとなった。この和中庵は彦四郎から引き継がれて藤井家の兄弟姉妹の持ち物



｜ 和中庵の門 (*Notredame Goes to Japan*) より転載



| 長尾兩山命名の和中庵扁額 (Notredame Goes to Japan) より転載



| 木堂犬養毅の揮毫 (Notredame Goes to Japan) より転載

だったが当時は空き家となっていたものだった。

この和中庵の門には大きな扁額がかけられ、そこには「和中菴」とあった。その意味 (House of Peace) を知ったシスターたちは、自分たちにとって何と意義深いことか、と大いに喜んでゐる。母屋にはいくつかの部屋があり、また大小の茶室もあった。素敵な庭には大きな石が配置され、客殿 (Palace Room) の前にひとつ、大きな茶室の前に同じくらい大きな石がひとつ置かれ、もうひとつは山から流れてくる水路に架けられたものであった。さらに二四の石灯籠がそこに置かれ、さまざまに工夫された植え込みや樹木も美しいものだった。大きな茶室の横には桜の木が植わっていて、自然の美しさを醸し出しており、この地域の桜谷町の名前の由来のようだった。

そのなかでシスターたちのもつとも興味を持ったもの、それは藤井彦四郎が骨董店で購入した美術品なのだが、庭に置かれた額 (Plaque) であり意味深いものであった。それは三百年前の江戸時代、キリスト者に対する禁教の布令の高札で、天和二年六月に近江国岡田での布令であった。藤井家は、シスターたちの感情を害することを恐れて除去しようとしたのだが、彼女たちの希望で、それを贈り物としてくださるようお願いした。彼女た

ちはこの高札を特別なケースを作つて大切にまた嚴重に保存することとした。

簡略であるがこれが、この和中庵が建築された事情およびそれが戦後すぐにノートルダム教育修道女会へと譲渡された次第であり、ユージニア・レイカーによる和中庵の印象である。このようにして藤井彦四郎が建てたこの鹿ヶ谷桜谷町の和中庵は、ノートルダム教育修道女会が買い受け、その南の敷地には昭和二七年にノートルダム女学院中学校が、翌年には高等学校が開校されることとなつたということである。

* * *